

野槌

下入六

止

曾生
775
233



門曾4
 籍 775
 巻 233

高橋

高橋

平定時物長光のらむひらびと
 のち入道ありよふひらるるよるる
 むあふとこ中なるひらるるの
 くちかた又はありてと
 せらぬやあつたにこころあり
 くらあひりけるあつたにこころ
 まつたに
 きてりては酒をむらり
 けりては酒をむらり
 人のあつたにこころあり
 けりては酒をむらり
 けてりては酒をむらり

甚だしく

中普惶恐迎拜即普堂設重裯地坐熾炭燒肉
 普妻行酒上以嫂呼之普從容問曰夜久寒甚
 陛下何以出上曰吾睡不能着一榻之外皆他
 人家也故未見卿普曰陛下小天下耶南征
 北伐旣其時也

最明寺入乃鶴思乃社系此次是足利左馬入道
 の謀先使とけりて立つてまゝとてさへけ
 りとありまゝとけりてまゝとてさへけり
 うらありび二載とえび之載りいりありと
 やらぬとて存ふとて主夫婦淫辭傳正あり

一地方の人とて社を建てたりとて年毎に給ふ
 足利のそのめ物人のかへりてとれども用
 意をさへとてあゝ乃らめ物と十あり
 女房ももいふ神とてうせとてほゝはるゝ
 たりその耐はるる人のありとてまてつゝ
 傳也

鶴岳 東鑑第一云後冷泉院時伊豫守源朝臣
 頼義奉勅伐安倍負任時有丹祈之旨康平六
 年八月潜勸請石清水建瑞籬於當國相由比御
今号之永保元年二月陸奥守義家加修後治義
下若宮四年十月頼朝点小林御之北山攝宮被遷之
 足利左馬入道 東鑑四十四云建長六年十月足利

九馬入道正義病惱已危急之間為祈之相州令
向彼第給廿一日入道正西位下行左馬頭源朝臣義
氏法名 正義卒系圖云義氏者義康之孫 義兼之子母北条時政之女

ありまうけ 御食在しうをり日か紀え
饗とみあへしあり俗よりそをそくよ
一献 礼記一献は礼賓主百拜
曲礼君子之飲酒也一爵而色澆如也二爵而言々
斯三爵而油々以退
うりあもび 勢中ありひ也
隆辨僧正 鶴岡別當也將軍宗御不例之時致

祈禱加持依為効驗為恩賞拜領美濃國岩瀧
卿被任僧正 吾專鏡四十二人えたりと

さくさくさくさくははりの足利乃漆物
最のちはくさくさく也 足利のそのめくさく物なり
ゆへは足利の漆物くさく也とすかかかかめ
のさくさくのさくさく
用さくさくさくさく物さく なる入たるさくさく
前さくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさく

世に云傳りい時形禪の法國修行して民間の憂
とぞ難波の屋敷居たり故采師師徳を以て
よありれりりるん東遊と考向し時頼法別を
ありく事又そゆるすも実承の執持也一日
二日も悲びわらふもあつてその一疾と名代り
をそく我身修約しりるもや見經内立世の旨
を時形事わりて見よりりてほい世替は唯
修約の事なりとわらふつるか或人のこころを
しそ天文は人おちあれて出るも前は信持
し禪の一夕来て宿とる夫ゆのこほて人と
やどひづきおのりもるしとひひたれをわり
そあつりよ緋細しりる時よかのおおゆを男

好敬して今夕と愛あり國のまゝにわらふ
人はあよゆらりてあれり不思議の星と見
しりてをと禪のつゞてゆりゆり呼がし徳
舎りて天文博士よをさされりりてやきし
ゆらめて修約の時おしりりてそれ微行
ハ君子のあり名にあつて漢唐の天子の微め
々大方潤富声色のよあし是大なり其事
宋は太祖の韓王堂に袂ゆりて敵國とるを
しりてあは密謀とるらん也是だも必し
もより此事也と定るるし一はやよ外の事
民の慈下の者しをあつんと思つてよるを
づき政のちだてあるべきにみづりて巡れの徳

の事かよしてありのんいあやうさ事也時形
よきせられたるれども不学はあやまり也その
禅と云ふは道とこのくまら澄と伝はり
ししくは智賢の書と伝はる物ありし必
京師とゆりせよすべし又將軍と云
ねとく小思と云ふそふとくありしは
了け人又説く國と治り切られたる
は衰れけ時よ窮ふと云れ又と罪な
きよありしは治りしと云れと定ふ
表状の義なりしと云ふ

或大福長者乃云人の業を所と云ふは
法と法と云ふ也まづしとくは
り法を人す法と法を人と思ふは
まづしと云ふと云ふは
他のことありし人間常法のありしは
かりしと云ふと云ふは
用心なり法と云ふは用と云ふは人の
世ありし自然と云ふは法と云ふは
と云ふは法と云ふは法と云ふは
財と云ふは財と云ふは財と云ふは
物と云ふは物と云ふは物と云ふは

は我とやあがすづこ思念きつれりといふはつ
あみとされて小要コヨウともなきべし次は錢ゼンと奴
のゴとくしくはうひりりわの物とあつたはく
貧者ヒンシャとまぬりりかゞは君とて神のゴとくを
まシとくともみてもさうみりりシの事なるれ
恥ハのゴとくも怒りうシの事なるれ
次は西シとくして約ヨクとくシとくはハとく
て利リとくあん人の富フは事シ火カのゴとく
あつたは水のゴとくシとくはハとく
錢ゼンつりりしてはハとく財サイをシとく
ちびチビとくシとくはハとく財サイをシとく
こコとくシとくはハとく財サイをシとく

而ニ財サイをシとくシとくはハとく財サイをシとく
事シの財サイとくシとくはハとく財サイをシとく
錢ゼンあれどもシとくはハとく財サイをシとく
何ナニとくシとくはハとく財サイをシとく
かカとくシとくはハとく財サイをシとく
あアの癰疽ヨウジュとくシとくはハとく財サイをシとく
きんキンとくシとくはハとく財サイをシとく
いイとくシとくはハとく財サイをシとく
欲ヨクハハとくシとくはハとく財サイをシとく

大徳ダイトクをシとくシとくはハとく財サイをシとく
うウとくシとくはハとく財サイをシとく

名月蓋をる活居る人也法記經にもをる窮
子有喻あり

形ある賦をのりて

莊子養生主吾生也無涯而知也無涯以有涯隨無涯
殆已 此語勢に似たり

若くは〜〜 津の〜〜 晉曾侯錢神論曰親

愛如兄字曰孔方失之則貧弱得之則富強無翼而

飛無足而走解嚴毅之顏用難設之口錢多者死前

錢少者居後之當時賄賂乃道さりりも行れられ

と曾侯の或どわりて錢神論を作て諷刺せり

兼好も此論のころりていりきあふりあり

大なりしけり〜〜 易乾卦曰水流濕火就燥

雲從竜風從虎 孟子曰猶水之就下也

富欲は色 色は聲色と云

尚書 仲虺之誥曰惟王不迨色色

長恨哥傳玄宗深居遊宴以色色自娛

抑人々 是より上大福を名け河とのべて是よ

る兼好が論也 論語注云抑反語詞

錢あれは用ひざるんは 漢の馬伏波が守錢

奴こなり〜〜 淳庵氏も是と云は錢鬼と云也

癩癩と病もの

貧富わく所れ 貧富の財を求むとも

ゆき富人の財を奪ふれともけりみて用ひる

貧乏も異なりす又貧乏も是事と云れ
を安樂たりして富人も同

究竟ハ理即ハ天台家ハ六即あり

理即。名字即。觀行即。相似即。分身即。究竟

即。是也。理即ハ佛法ハ名字とも云くぬ薄地

底下の凡夫乃至畜類まで皆仏性と具する云

也。名字即ハ佛法と云名を知る也。觀行即ハ

坐禪修行する也。相似即ハ佛菩薩修行より近

くとも似る也。分身即ハ菩薩の位より衆生漸

度のため小變現する也。究竟即ハ妙覺位

也。本地也。佛も本ハ凡夫也。一切の凡夫狗彘

類も至る也。悉皆佛性あり。以究竟ハ理即

有り。相似と云。悟了同未悟と云も以義有り又

本有圓成佛作什麼為迷倒之元生ともい

ふ有り

大款は無欲も似有り 聖濟總録百九十九日

欲生則三尸生欲滅則三尸滅故至人曰欲者不

欲不欲者欲

無智慳貪乃人々皆欲深ふして一紙半錢を

朽しめども好生れぬあめいあまると金銀を費

すといんともれハ極樂に生れて金玉の堂に居

て百味の飲食をうくる大樂も愈んと欲ん

ありゆへも今生もて布施するも中欲も似

しり異端の人と侮むる事也

瓶之人よくひたくもの也 瀬川殿を今人が
寝たる是と瓶より分初めて其印寺の
おとまりの法師は瓶に飛よりてくひつさ
くれハ刀をぬきて是とすきく君瓶二丈と法を
ひく川つらまらぬ二のかけぬ法師をあま
とぬられぬとぬくまらりりり

城川殿 久我一門基具を改むる号は川

基後大納言也

本寺のおに和寺といふ一統云本寺と
と乃た和寺より水のまの跡あり印は印
さう好まやとも寺は印と号を新安ら
より 磯瀬(り)又新安寺はあし西の方より

本寺の本寺の馬場とまうりいふの事也

江原方の新とれて云龍秋の道よりとてハや
しどく好くも也先日ありて云龍意は
りきりあて意深の事われは板笛の五れ
穴ハ聊いふりきりあてのゆりきりひそかき
存をきりあて干の穴ハ平調の穴ハ下調也其
るハ勝絶調とつて七より上は穴双調次ハ見
調とてさそくハ穴黄鐘調也さそくハ齋鏡調
と置て中は穴盤渉調中と下とのありひり
他調ありかやうよりさそくハ皆一律とぬる事也

其の元のみ上なるは、潤子とありて、
吹くがりも、しきり、よゆり、
まは、元と吹く時、必、
少ありは、吹く人、
より、減る、具あり、
は、年、向り、
吹く、
ゆ、
て、
の、
り、

呂律の物、
あ、

曰、
豊原氏、

魏秋、
魏秋、
魏秋、

云也

程意の、
荒涼の事

見、
早下、

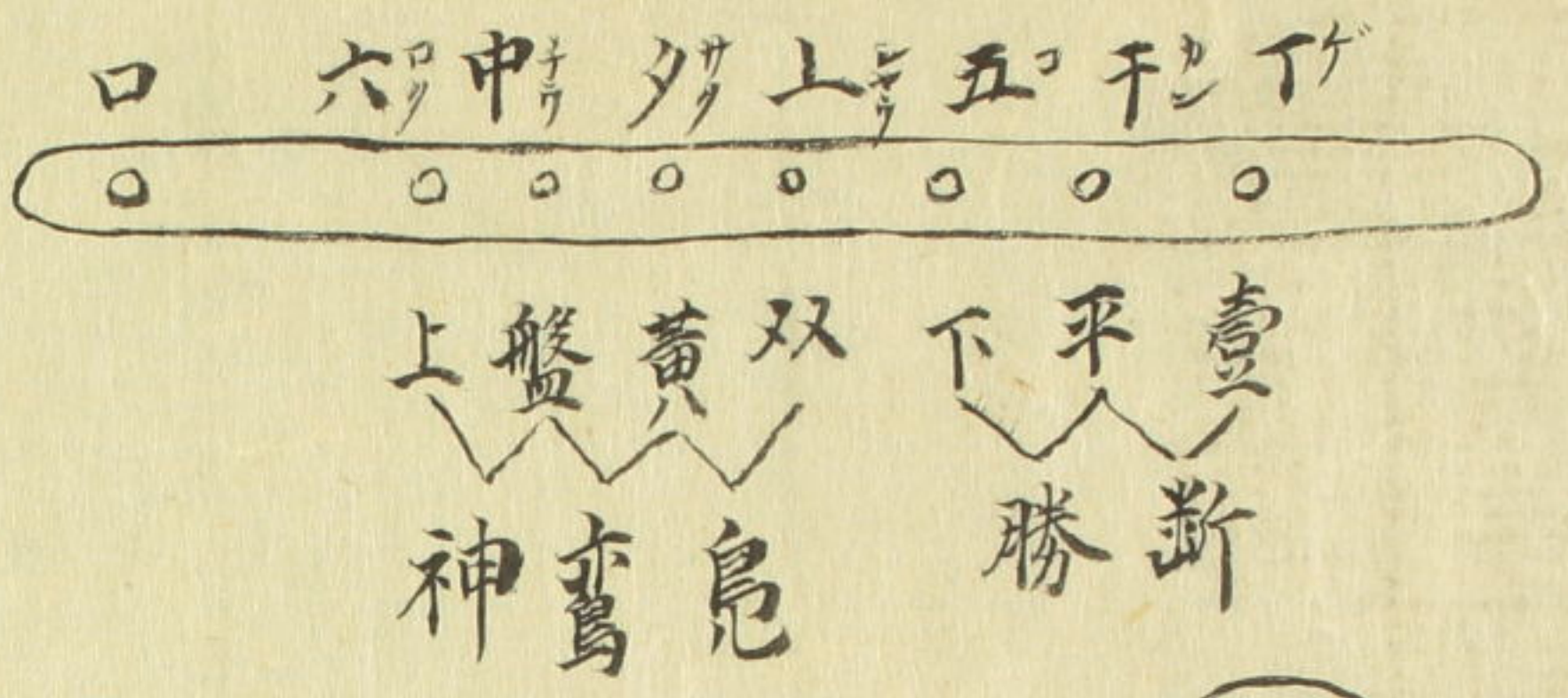
源、

横笛、
常、

十二律、
十一、
十、
九、
八、
七、

三、
二、
一、

響鏡調八盤涉調九神仙調十上無調音調



此二調子上ノ圖ト相違アリ

此說ハ豊筑後統秋自筆ヲ以テ寫也上ノ圖ノ說ト少相違アリ追而可尋究者也

ひそく又乞とゆえ 乞も界下の洞也

必れく口とのうは義也吹とゆよ口とのう
 なをえんら也

後生とくも論語子罕篇子曰後生可畏焉
 知来者之不如今也

京茂 大津氏ハ晴の山は井と云ふは
 乞も笛吹地下は楽人也

呂律のりのみろのさふは
 首楞嚴經曰譬如琴瑟笙簧篳篥琵琶雖有妙音若
 無妙指終不能發汝与衆生亦復如是

何事も色むい賤くわさくわされどもいささか
舞樂乃く都よ耻すといひ天王寺の伶人は
中侍も高き乃く糸をよく固と云くありせ
てもの音おめさくさくありゆる事外
よりもさられらねる太子の時堂の前の鐘也
此と云くせと云くはいつの時堂の前の鐘也
ま教貫鐘調のりあり也寒暑ありありして
あがりありありあり二月涅槃會より聖
靈會までの中を指南と云く秘教あり事也
は一調子と云くはつづれの声と云くはゆる
ありと云くは凡鐘あり黄鐘調ありを
是を帝乃調子祇園持念乃帝常院の声

かり西園寺は鐘黄鐘調といふゆへと
あまの交いりくまされどもこれいさか
を國よりくづりていられり浄金剛院乃
鐘の声又黄鐘調也

是も音樂と云くは前記の
天王寺 推古天皇清寧聖徳太子建
多聞持國増長廣目は四天の像と安置
ありぬといひ天王寺と云くは
伶人 音樂ありと云くは黄鐘調あり時伶人
樂人ありといひてはせよ伶人といふ也
はるを

六時堂

英鐘調のりり也 涼燠八月十五日秋のあり

水如阿ふらる月をみとつるあはれこころひそ秋のあり

涅槃會 二月十五日也

聖雲會 太子の忌日二月廿二日也

ソゾレの色をともさる

尚書云八音克諧無相奪倫

無常の調子 平家地終り、祇園精舎の鐘

の妙法結めををたひびとあり

祇園精舎の無常院

大藏一覽第二云經律異相云佛大祖越須達多

長者居舎衛國常施孤獨故曰給孤獨因往王舎

城護弥長者家為男求聘因見其家清佛說法

須達本車外道忽聞佛法生歡喜心榜足作禮而

白佛言我舎衛國人多信邪弟子欲營精舎者

往化願垂聽許仏黙受請即遣舍利弗指授規則

遍処來踏唯有祇陀太子一園廣八十頃林木蔚

茂幽靜可居既得勝地往白太子太子戲曰滿以

金布便當相与須達喜曰此園已属我矣太子對

曰我戲沿乎兩成其淨時首陀天下為評議以太

子法不應妄語價既已決不宣中悔須達出金布八

十頃須更欲滿尚缺少地祇陀即詔須達園地属

御樹林属我共以上佛捉繩定基之際舍利弗忽

笑須達問其故答曰汝始於此經營而六欲天宮殿

已成汝果報也即借須達道眼果見問舍利弗是

六欲天何處最樂舍利弗言第四欲天補陀菩薩常彼說法須達言我生此出言既竟餘宮悉滅精舍告成凡千二百處白王遣使請佛安居靈宇函第三卷

祇陀太子所園名祇園與之給孤獨須達長者名也故云給孤獨園也天竺此山祇園精舍竹林精舍普光法堂那羅寺逝多林也或云給孤獨園之逝多林也云々もソリ 祇園園經云緣覺十二日緣院中有大金鐘風吹音聞八里迦葉仙時毘沙門天所造每至四月八日鐘能遍迦葉仙涅槃經四象咸聽之

西園寺

拾芥云衣笠元良太政大臣公經公の家

東大寺の鐘法勝寺の鐘五大堂鐘皆鑄損也一故改鑄らまじり東鑑七九にあり銅
不_レ足_レ也西園寺の鐘ハ黄鐘調_レハソんが
もあ也とあり

法金剛院

法金剛院 法_レ山_レ南_レ大_レ秦_レ乃_レ東_レ日_レ跡_レあり

拾芥云本名天安寺待賢門院以達立也法の字と浄くらすなり浄金剛院を嵯峨此
推野にあり

建治弘安の法い祭は日の放免のつけ押しと
 うなる緋の布に五きんを馬をはらうて尻
 ふらうとあえやしてその井かこさる水干に
 つまき歌はれどしひてわらうことほ神
 足及びゆくなどとも具ありてあつらえ
 しそゆくうごむる道志の今日もさ
 りゆりもけし法をゆきものこをさうてさ
 くのゆらうりて茶のゆりこ物取おほ
 くとあおはゆと人よりのそとみづらふ
 ことさふもさびりさつばさきじみゆい
 やらんがふ
 建治弘安 昔は宇多院の年号

祭の日 賀茂乃糸の日也

放免 東鑑廿三建保六年六月將軍家
 為拜賀參鶴岡 随兵江判官能範布衣冠單緒
 細尻鞘太刀郎等三人雜色四人禰度縣一人放免四人

りりの舟うきうき水干よはきそおほふ
 雲は舟よあれる勢はゆきもあさる
 舟人よさのま
 道志よもの職原下檢非透使のり志有明法
 道輩六位時任衛門志郎蒙使宣旨也凡志者
 奉行使廳諸公事之故以當道為其撰地号道
 志也

明法道の輩乃使^シ願^シ此志^シあり^テ右馬の廐門
の志こなる^ニ弘道志^シと云也

法をりの 祭礼の時わらりのあつきのもの
よき^ニ放免^シつひものありも也

さ^ニ差^シ 衣服車馬等れ^ニさ^ニり^テ皆法令^シり^テ
より義也

は^ニ辰^ノ頃^ニ迄^ニ乃^シ冬^ノ者^ノより^テい^ハ兼^テ好^クが^レ時^ノ分^ノも^ノ
このあ^ニい^ハさ^ニり^テい^ハつ^クは^レ物^トと^リつ^ケて^シさ^ニ差^シ
ち^ニり^テと^リ也^ト今^ノ深^ク業^ヲ終^ルく^ニ極^ニ所^ニた^リと^リづ^ク
う^ニり^テと^リも^ノあり^テ昔^ノより^テい^ハつ^クは^レ事^ノの^ノ
ら^ニも^ノあ^ニい^ハさ^ニり^テ事^トも^ノ推^シて^シ知^ルべ^ク

^{タテ}竹^ノ谷^ノ素^ノ領^ノ房^ノ東^ノ二^ノ際^ノ院^ノへ^テ戸^ノつ^クれ^テさ^ニり^テ
^マ亡^ノ志^ノの^ノ追^テ者^トい^ハ何^ノ事^ヲう^テ猶^ト利^クお^シる^ニも^ノ也^ト
せ^ニた^リれ^ニは^レ光^ノ明^ノ真^ノ言^ノ宝^ノ篋^ノ中^ニに^テ陀^ノ羅^ノ尼^ノの^ノ戸^ノを^ノ
れ^ニり^テさ^ニり^テと^リ也^ト昔^ノより^テい^ハつ^クは^レ事^ノの^ノ
念佛^ノより^テさ^ニり^テ事^トも^ノ推^シて^シ知^ルべ^ク
ゆ^ニり^テぬ^ニぞ^クも^ノい^ハつ^クは^レ事^ノの^ノ
い^ハつ^クは^レ事^ノの^ノ
して^シ巨^ノ益^ヲも^クべ^クと^リて^シ現^ニに^テ経^ノ文^ヲと^リて^シ及^テつ^クは^レ
何^ノも^ノ思^フこと^トも^ノい^ハつ^クは^レ事^ノの^ノ
し^ニり^テん^ノと思^フひ^テ本^ノ經^ノの^ノま^ニつ^クは^レ事^ノの^ノ
あ^ニら^ニは^レ事^ノの^ノま^ニつ^クは^レ事^ノの^ノ
け^ル

竹谷

東二條院 常盤井相國實氏公の法心
その公も也 深美院の所也
光の志也

沙不集二下云 醍醐竹谷の常盤井
上人の浄土宗の的迹と聞かきし 亡魂の著
掘と云ふは 何の法に勝るかと 初宣は下
さりとけり 其の室篋 即ち陀羅尼 光の志也
其の志は 何れと云ふ 其の門中 亦た其の
事 人思て 浄土の門の所也 念佛して 廣大義
掘也 其の功法也 何れと云ふ 其の所 亦た其の
まじりて 他家の利益と云ふ 其の法也

つぎとせり 其の事 亦た其の所 亦た其の
し 念佛して 念法と云ふ 其の所 亦た其の
て 其の事 亦た其の所 亦た其の
色は 其の理 亦た其の所 亦た其の
し 念佛して 念法と云ふ 其の所 亦た其の
知識も 亦た其の所 亦た其の
り 其の事 亦た其の所 亦た其の
十 念佛して 念法と云ふ 其の所 亦た其の
の 念佛して 念法と云ふ 其の所 亦た其の
満て 其の 念佛して 念法と云ふ 其の所 亦た其の
愛して 其の 念佛して 念法と云ふ 其の所 亦た其の
う 念佛して 念法と云ふ 其の所 亦た其の

しるすして須臾の間に於て生して一切種
智と梵一任神處ありて生れり光
のふんを又儀軌の説に地獄におりて苦患
ありついで亡魂よけある一區を廻向せられ
無量壽如来に亡魂よけありて生れり
世尊一門守一法を説く況や十字區満ん
切法けりるすす説きたり又亡魂の裏
ありてけあると四十九返満して廻向せられ
無量壽如来に靈を病負して生れり世尊
一門守一法を説く又經中よりけり罪
と満て出せを加すなり一區一區してけ
出せと養法ありて死骸ありてせん

出せより光をりれりて靈魂と云ふひて生れり
けりて説き一り念仏を乞ひての又説い
まごんをよびゆす道理あれども文後と
事ハ養一區一區に偏頗ありて事
をせられ身他家とてけりるありて事
念佛の中ありてなり又説ありて
して養一區一區をけりて承傳
して一區一區をけりて承傳
して一區一區をけりて承傳

きん乃のわりのあきあきとる也鶴とる

いさけりゆへに、この御事也

法皇御記の御事也、内府基家公号、
齋殿又号、沙金大臣殿、井陸妙もも

は、所ある中、に上、お授、本、傍、心、強、法、中、の
り、に、書、の、せ、り、部、と、り、て、あ、つ、ひ、の、義
の、り、也

法陽師有宗入道録念りのつりて、あるも、
あり、あ、つ、り、入、て、は、を、り、つ、り、ひ
ら、き、し、て、後、ま、し、り、あ、る、も、も、事、也、
の、の、ま、り、あ、る、も、も、法、は、し、り、あ、る、も、も、
し、と、つ、り、し、け、り、つ、り、あ、る、も、も、
か、し、り、地、も、り、つ、り、あ、る、も、も、
事、也、
有宗入道、安倍晴明、十五代の孫也、有重、
り、り、法、陽、以、止、之、位、
ま、り、の、こ、も、も、も、も、
と、あ、る、も、も、の、り、り、り、り、り、り、
論、沿、憲、河、篇、島、櫻、躬、稼、而、有、天、下、
中、庸、人、道、敏、政、地、道、敏、村、

後、漢、列、傳、世、二、樊、宏、字、廉、卿、南、陽、人、也、
賢、物、先、種、梓、漆、入、味、之、然、積、以、歲、月、皆、得、其、用、

後漢列傳世二樊宏字廉卿南陽人也、
賢物先種梓漆入味之然積以歲月皆得其用、

向々笑者咸求假焉

多^{フホ}久^コ助^{スケ}が中^{ミナ}より通^ツ憲^シ入^リ乃^ハ舞^マは^ハ中^ノに
具^ツある事^{コト}と如^シ紙^シを^シび^テひ^キて^シは^シれ^ル禪^{ゼン}師^シと
ソ^ノひ^キり^テ如^シ紙^シを^シび^テひ^キて^シは^シれ^ル禪^{ゼン}師^シと
さ^ウま^シれ^ルと^シり^テ也^ニ島^{シマ}帽^{カウレ}子^コと^シひ^キ入^リさ^ウま^シれ^ル
何^ニと^シも^シひ^キて^シは^シれ^ル禪^{ゼン}師^シと
つ^つと^とも^もら^らひ^ひを^を紙^紙と^とし^したり^り先^先白^白拍^拍子^子に^に根^根
元^元也^也佛^佛津^津乃^乃本^本縁^縁を^をう^うま^まな^な深^深光^光に^にお
り^りの^の事^事と^とし^したり^り後^後の^の事^事も^もあり^{あり}
衆^衆菊^菊と^とし^したり^り後^後の^の事^事も^もあり^{あり}

多^{フホ}久^コ助^{スケ} 久^コ資^シと^とし^したり^り本^本あり^{あり}衆^衆菊^菊也^也多^多

氏^{ウヂ}也^也今^{イマ}も^も終^{シマ}人^{ヒト}は^は多^タの^ノ氏^{ウヂ}あり^{あり}多^タ久^コ六^{ロク}大^{ダイ}の^ノ後^{ノチ}也^也
出^デ雲^{クモ}乃^ノ大^{ダイ}社^{シャ}と^とも^も延^ニ嘉^カ神^{カミ}名^ナ惜^シる^ル多^タ社^{シャ}と^と
わ^わく^く津^ツ武^ブ帝^{テイ}の^ノ子^コ神^{カミ}八^{ヤチ}井^イ耳^{ミミ}命^{メノト}は^は多^タ氏^{ウヂ}の^ノ

遠^{トホ}祖^ソ也^也

通^{ツウ}憲^シ入^リ道^{ダウ} 少^シ納^{ノウ}言^{ゴン}入^リ道^{ダウ}信^{シン}西^セ也^也諸^{シヨ}道^{ダウ}と^と通^{ツウ}ぎ^ぎり^り人^{ヒト}を^を

平^{ヘイ}治^チ元^{ゲン}年^{ネン}十^{ジュウ}三^{サン}月^{ゲツ}十^{ジュウ}二^ニ日^{ニチ}信^{シン}賴^{ライ}礼^{レイ}送^{ソウ}時^ジ信^{シン}西^セ見^ミ天^{テン}変^{ヘン}
無^ム知^チ其^キ哭^{キウ}入^リ太^{タイ}和^ワ國^{クニ}多^タ原^{ゲン}山^{サン}自^ジ宮^{キヤウ}入^リ棺^{クワン}不^フ死^シ之^シ前^{マエ}
被^ヒ掘^{カキ}埋^{ウツ}土^{ツチ}同^{ドウ}月^{ゲツ}十^{ジュウ}五^ゴ日^{ニチ}伊^イ賀^カ守^{シュ}光^{クワウ}保^ホ尋^{ジン}出^デ社^{シャ}所^{ショ}注^{チュウ}進^{シン}
即^{キゾク}掘^{カキ}出^デ屍^シ骸^{ガイ}斬^{キリ}首^{ウタ}渡^{ワタ}大^{ダイ}路^ロ被^ヒ梟^{セウ}獄^{クツク}門^{カド}

南^{ナン}家^カ巨^{キョウ}勢^{セイ}丸^{マル}后^{コウ}胤^{イン}
實^{ジツ}兼^{ケン} 通^{ツウ}憲^シ 澄^{テイ}憲^シ 聖^{セイ}覺^{カク} 隆^{リウ}兼^{ケン} 憲^{ケン}實^{ジツ}

元^{ゲン}亨^{コウ}祝^{シユ}書^{ショ}九^ク云^{クニ}唱^{セウ}道^{ダウ}者^{シャ}演^{エン}說^{セツ}也^也治^チ兼^{ケン}養^{ヤウ}和^ワ之^シ間^{カネ}澄^{テイ}

憲法師狹給事之家學執智者之宗綱呂也射
儒林而花鮮性具出古端而泉湧一昇高坐四象
清耳晚年不慎戒法屢生教子長嗣聖覺克家
業課唱演自此教世系嗣脉々覺生隆養々生
憲實々々生憲基朝廷躋其諭導緩于園房以
故氏族益繁寬元之間有定園者園城之徒也
善唱說又立一家猶如憲苗種方今天下言唱演
者皆効二家之痛哉無上正真之道流為邪偽
鄙優之伎焉

之六給事といつるハ通憲也然れハ色の有藝

之ハまゝに澄憲ト傳(秋)秋の事トハ儀の禪師
ト教めし見しころ給事中ハ少納言唐名也
儀禪師 東鑑第六文治二年三月一日豫州安靜及
母儀禪師自京来于鎌倉四月八日二品并御臺所
禎鶴岳召靜女於回廊欲令施舞曲彼天下名人
也欲見其藝再三固辭不得已而回白雪之袖發
黃牛之歌祐經打鼓畠山重忠為鈿拍子靜先吟
出哥

云云吉野山峯は白雪をまきて入り人の跡
うらやまき次を別曲は又冷和あり
まづやまのたのむまきまきりかへ

い〜とくふるす〜
其壯觀梁塵
強勳上下催眞ミコト五月十四日祐經ミナモト梶原景茂カキハラ千
葉常秀チハ八田朝重ヤタ藤判官代邦通フジノ等相トウ具キ下ノ若
白静旅宿催宴シラカ郢曲エビ尽ス抄シヨウ磯イソ禪師又施藝シヤンシ同ドウ廿
七日入夜静女依大姫君仰參南御堂施藝賜祿シヤンシ

い〜とくふるす〜

佛沖乃本縁 佛沖の由来縁起也

源平威衰記十七云世よ白拍子くまののあり
漢家よ虞氏揚貴妃王昭君をく〜
皆あれ白拍子也我ゆ〜
子歳若前〜二人の花女舞り〜

初ハ世云く立鳥帽子腰刀とあり〜
〜男舞〜
〜鳥帽子腰刀と止て水干に袴〜
舞〜
〜祇王妹とバ祇女〜
あり清清盛入道冠夢〜
磯の禪師と白拍子根源也〜
平家物語にハ鳩千歳若前と白拍子の
ふめ也〜
〜元朝〜
龍飛紀畧第一云元順宗至正十三年哈麻先魯
帖木兒進西番僧教元主行房中運氣之術号

演揲見法又進僧伽璘真善秘術密法元主皆
習之詔以西番僧為司徒伽璘真為大元國師各
取良家女三四人奉之謂之供養嘗謂元主曰陛
下尊居萬乘富有四海不過保有見世而已人
生能幾何當授此秘術大喜樂禪定於是元主
從事於法廣取子女每遊宴以宮女十人按舞
名為天魔舞首垂髮數辨戴象牙冠身被
纓絡大紅銷金長短裙襖雲肩合袖天衣縷帶
鞋襪各執加巴刺班之器內一人執鈴作奏樂又
宮女十人練植髮勒帕常服或用唐帽漢衫所
奏樂用竈笛頭管小鼓箏琵琶笙胡琴響
板以宦者長安迭不花領之遇官讚仙則按舞

奏樂宮官受秘法密戒如元主諸弟八郎者與哈
麻妹婿秃魯帖木兒老的沙等十人号倚納皆
有寵任在元主前相與褻狎甚至男女裸處所
及曰皆即兀該其群僧出入禁中無所禁止醜
外聞皇太子深嫉二僧所為欲去之而力不能
見法行言大喜樂也此皆即兀該
行言事々無碍也

近奉出雲巫系之來之僧衣之者之鉦之
佛号之唱へて如ハ念仏之りこひよそれ
後男之嫁束トク刀之換ハ歌舞之俗より

ゆきくも存なく世の風俗は喜わらざる怪寓
之物終せしに胡元の大魔舞はたはらふべき
似て是をゆきくもとせられり

深光坊 河内守大盛物 源氏物語の河内本
と云はば人の所作也

亀菊 東鑑廿五兼久三年正月武家背天氣之
起依舞女亀菊申状可停止撰津國長江倉橋兩
庄地頭職之由二箇度被下宣旨之處右京兆不諾
申是幕下將募勲功賞定神之輩無指雜息而
難改由申之仍逆鱗甚故也

龜菊と云ふもまはるる院より龜菊が所

松と鎌倉へあるまじく修るるも義時回心
せざるゆゑに其あはくぬ兼久其礼たつて
兼久其礼云撰津國長江倉橋はたはら院中
よ返くる使れり口相子龜菊よ治りけり
之恩賞の地頭領家と忽流しければ龜菊
憤と念ぞ歎きりしれ一院やとる所を
被思ふて地頭と改易ありし中其被下され
義時りけり地頭職は半上を其ありし
と改名大將平家と地頭之解状は日本文の
撰地頭補とて平家追討の六年が
國々地頭人等或は子とて其或は親と
して世宗法と稱すか御の勲功を随てし

然るにん物とせり罪あきく義けが計と
きて改易すべしやとてしも不奉用し
くはつ後深あらずあなれ開東とせり
つさ事思を定て國この昔もいふをそ
めされけり

後鳥羽後乃沖時信濃前自行長智玄卷
ありたりが樂府の法海義法書よりされて七法
の経とありありなれば五法の冠者異
名とつきにたりはらうと事しと學問と
みそと通世しとありけるを意能初めつ經

ありののとしり教とともりとてそと不後よそ
ち知られれば信法入とと持物と経よりはり
も入る事家地經と作ると生佛といひたり
音目と教とととせりりそと山つの上と
めゆととととと九帝判官の事ととと
初て書のそととと蒲冠ととととととと
けりやとととととととととととととと
武士の事とととととととととととととと
武士ととととととととととととととと
聲ととととととととととととととと

信法お司り
智玄の卷
智玄の字尚書竟曲に出り

又後漢書桓榮曰今日所蒙執事之力也これ
と字同のありき也と云義あり

樂府 古樂府あり 新樂府あり 文選に樂

府の詩歌とのせり 元稹集曰唐初集等樂

府乃あり甚多し 七德舞 樂府伎女

とのあり 樂府雜記と云也あり

七德舞 貞觀七年正月更名破陣樂曰七德

舞 白氏文集新樂府注太宗為秦王破劉武周

軍中相与作秦王破陣樂曲及即位宴會必奏之

以百廿八人被銀甲執戟而舞凡三變每變為四

陣象擊刺往來後更名七德舞

十八史畧曰唐太宗七年宴玄武門奏七德注曰

秦王破陣樂曲更名七德舞七德者蓋取禁暴
戢兵保大定功安民和衆豐財之義也

七德乃事の左傳宣公十二年の祥也

意法和の 上と云ふなり

一藝 退之進学解名一藝者無不備

生佛

とて山門の事と 意法より取れり

ゆゝ書多りあり

かゝ判官 義經也

蒲冠者 後立位下三河守範頼於遠別蒲生御

厨出生之間号蒲冠者頼朝乃弟也文治二年於

伊豆北条依舎兄源二位命被討

は辰に云く平家物語と云はる考る凡義
経好く云く季く範規の事ハ思たり又勸修
寺良門十二代の孫葉室時長平家物語作
者ハ隆一也と云々神位ありそれハ四十
八巻乃威衰礼なり一ノ行長ガ法云るハ十
二巻平家と云生佛ヲ教たり又俗間に平家
勸文一冊あり六人の作者と載たり并ニ誤
抄ガ云レハ信用もす九バ物語ハおれ
威衰記ハ平家物語一ノ事ハ内ハ不同也
あり長門赤間関阿弥陀寺を見たりハ
十六巻あり又和歌よりあり本ノ京なる人の
源と云るものハ廿餘巻あり又琵琶法

昨のうらふもはるかに不同あり

六時礼讃ライサンハ法然上人乃弟子安樂と云ひ是ハ
僧經文キヤウモンとありて造りて法とありたり是ハ
本素善観音ウラミヤと云ふ儀ありと云を成定て声明
めかたり一念ハ念佛の最也ハ暖誠院ハ法
代よりと云まはり法華讃も同じく善観音
はどのも也本ハ釋迦念佛ハ云水法法如輪
上人ウラミヤと云まはり
六時礼讃 晋の志を法所蓮社と結びて是
記漏と刻く六時と礼と云の時を此に於

興キョウと云クの廣コウ乃ノ善導ゼンドウ性コウ生コウ禮レイ讚サン偈ゲと撰集センシュツて日
興キョウの勤キン行コウと云クは修シュ安樂アンラクが作サク也ヤと云ク異イ説セツ
かろカよヨと云ク淨ジヤウ土ト家カ人ジンと云ク
安樂アンラク 法ホウ苑エンのすス也ヤ修シュ連レン安アン樂ラクと云ク二人ニヒトあり
ほろホろロの院エンの時トキ別ベツ時ジ念佛ニホフと云クはハめメの所ショ礼レイ讚サン
を唱ナゲてテ馳チ笑ウエはハまマ後ゴ群グン集ジュせセしシにニ官カン女ニョ心シン
しシてテ出デ家カと云クはハほホろロにニ送ソウ録ロクありキ
修シュ連レン安アン樂ラクと云ク罪ツミの行コウ小コウ官カン人ジン秀シュウ法ホウと云ク作サクと云ク
條ジョウ河カ尔ニめメてテ安アン樂ラクと云ク斬キル名ナ
法名如願

元亨ゲンコウ釈書シャクショ第廿九ダイニジュウキウ云ク念佛ニホフ者シヤ持テ誦ジュ之ノ一イチ支シ也ヤ修シュ多タ羅ラ
中チュウ持テ于ニ佛ブツ々々地チ方ホウ局キョク施セ陀タ焉ニ或シ釈シャク迦カ焉ニ其キ始シ与ト淨ジヤウ土ト
同ドウ出シュツ已ニ具キ于ニ上ジョウ矣ヤ元ゲン曆リキ文モン治チ之ノ間カン源ゲン空クウ法ホウ師シ建ケン專セン念ネン

宗ソウ遺イ派パイ未ミ流リウ或シ資シ于ニ曲キョク抑ヨク揚ヤウ頓トン挫サツ流リウ暢チャウ哀アイ婉ワン
感カン入ニ性シヤウ喜キ入ニ心シン士シ女ニョ樂ラク聞ブン雜ザク沓クツ駢ペン圓エン可カ為ニ愚ウ化カ之ノ
一イチ端タン矣ヤ然シテ流リウ俗ソク益イキ甚シ動ドウ街ケ伎キ戲キ交コウ燕エン宴エン之ノ末マツ席セキ受ウ
盃イ觴ソウ之ノ餘ヨ瀝リキ与ト馨シン史シ倡シヤウ妓キ促ソク膝セキ互ゴ唱チャウ痛ツウ哉ヤ真シン佛ブツ秘ヒ
号ゴウ湯トウ為ニ鄭テイ衛エイ之ノ末マツ韻イン或シ又マタ擊キキ鏡キヤウ磬キヤウ打ダ跳テウ躍ダク不フ別ベツ
婦フ女ニョ喧ケン噪ソウ街ケ巷コウ其キ弊ヘイ不フ足ジュ言ゴン矣ヤ

太タイ秦シン 廣クワウ隆リウ寺シ也ヤ秦シン氏シのノ人ジン來ライてテありキ故コ太タイ
秦シン寺シと云クいハふフ也ヤ

善ゼン觀カン房ホウ 法ホウ事ジ談タン 善ゼン導ドウ性コウ生コウのノり
けケけケけケつツきキるル事ジ善ゼン觀カン坊ホウのノありキ
千セン本ホンのノ釋シヤク迦カ念ネン佛ブツ

文永 龜山院年號
如於上人

よき細工をかくしにのみとほりあはれし妙
観が刀ハハのこをくくつら

妙観 元亨釈書云勝尾寺講堂觀音像室萬十
一年七月十八日比丘妙觀刻之千臂千目莊麗端
嚴又加四天王像凡五尊三十日白成八月十八日
妙觀合掌而化觀音之靈在也
仲芳撰別勝尾寺募縁疏にも妙觀雕像此
事と書つゝ こそ妙観勝尾寺の佛工と

よき又別人の事なりやあつらん人の
うらりい人あり細工の上りて竹木はりの
て人形を作り大なる壺甕とまゐりて衣の
ふらぬやうに小壺と小笠あはれ作りも
うらりいりりいり人さきのねりり小刀と
はなありりりり

立寄内裏より妖物をとり藤大納言殿より
物に殿上人毎思ふて基とせうりけるは
簾とせうりげとるやありとせうりひき
狐人のやうにほりてけりとのをさへふとあれ
しやうよまゐりてまゐりひきげめをりお結は

むせんぐけりめいそ

の系目表

後醍醐院時皇居ありと云傳りて

教大納言

未練の机

鍛錬とぬと未練くりふうはそを

切りのぬ板あり

野槌下巻五者文政十戌子秋九月二十七日夜於燈下写

中村直衛

ろれく別當入道いさうりやま危下ちり也或人
乃りふていみさく鏝せりさうりたれ
者人別當入乃の危下とえつぬとあつ
さゆとさうらひぞんといふとたあひま
せお當入乃ゆり入よえは後百日の程と
きりゆり成今日うさゆりづさあひま
し街んそきりれりいさうりつさ
具ありて人さあつりちりある入山山
政入乃殿りわさうりつさあひま
ゆ事一あれはさうりゆりえゆり也きりぬ
づさ人なりゆりさきりゆりゆりゆり
よりかん何條百日の程とさうりんぞとの

野ひちる〜物〜くま〜〜人分りり
経けりい〜物〜大方あるまひて身あがり
も無なるてやま〜うわが尚さう〜物事也
まんなの響キマウ應オウる〜ほのてわ〜きやう
よりゆ〜まほ〜識チよ〜けさ〜きごまこ
や〜ま〜て〜りわ〜りい〜人よ物を
〜き〜物もほのて〜て〜ま〜ん
〜り〜り〜のあ也コナキ悟チ〜り〜ん
〜り物負サけ負サわ〜ら〜つ〜は〜る
り

園別當入道 基氏卿天福二年十月十七日上タテマシ辞
状出家法名圓空

ゆりねん 全オホサ双也

庖丁 日本庖丁者けけのい田原家か

庶流山蔭中納言也

莊子養生之篇に庖丁牛と解事と詳に

あり丁氏よく庖厨の事とありて宰サ烹カ

すりの人よ庖丁ら云也オホしよりチ力チ云也

以カ数チ多チ〜伶人名と倫と云人伶倫と云巧

匠名と匠と云ひて匠カ匠カと云高と云の

く車輪と云けりて輪カ高と云奕オホ秋アキ名

秋〜〜て奕オホと云くすの形也オホ琴オホ輪カいり

琴オホひるの其名に轉也オホ京房易と講カする

故易京と云醫和醫オホ緩と醫者也

ためしひ

猶豫しうく

百日経

百日の月毎日法しめて経さん

とあり

まげて中うせん

是邪ともうけきん也

西山を政入た敷

西園寺公経也一糸相國とも

中う人に物や

人に物をとらせしり

論語堯曰篇於之与人也出納各禮有司

孟子曰可與可無以與與傷也

人よりのとらゆべし時あるふれハ氣休よる

也うけしり人もよるふべしきんがらぬ

さうをどたぬふ時ハむじんかありなる

うけしりものも氣休あり也時又國をど

と義ふありしりてあきんこありしとき賞

と絶ありしりもなき時をくちけりやど

の三人ありしりしりては日ハ落れと初ら

やしきと有司ともふれ也又これまじ

きものふりしりハ知て登りしりハ我思

惠とやあり也ゆき君子ハ取子のるをつ

あし

すべて人の智を結なりなるもの也あ人れは

るをゆきしりぬが父のあそ人を物

ソヤとて史書の文とひらひらとちつちつと
まじりていふと尊なるおかしきことなり
まじりていふなり

又ある人の評として琵琶法師の物語とさか
んとて琵琶法師の物語とさかんとて
杉りたることなりとつけしことあり男
中へありていふことあり古きことあり
柄ありやあざむきとされば此とあり
琵琶法師の物語とありていふことあり
昔の物語も及びぬことあり

ふとていふことありていふことあり
もの本とてやいふことありぬのめとあり
人作られしことあり人の事とあり
ふとていふことあり

ひたとの歌とて回歌とするありとて
て別歌とす

琵琶法師の物語 平家物語あり
ちり 桓字也 琴とていふことあり
琵琶法師の物語とていふことあり
楽人の巻の巻は四つ法也法師の巻あり
なり
所とありていふことあり 所と長くあり也

あるはる氣文 ちのなれはる御まへ侍うら
新人也侍ふをそりらり〜〜〜〜〜の形也

人の地取とひのり〜〜〜
ほいんはれ〜〜〜
う〜〜〜
〜〜〜
海よ〜〜
ま〜〜
ま〜〜
〜〜

〜〜〜

人〜〜
〜〜人の事〜〜
お〜〜
〜〜
〜〜
〜〜
〜〜
〜〜
〜〜

けしある家のいぢりなる人へ乃まきく入
 うゆ事かれあるうまきおめいたり人み
 どりふま入^{キツチ} 狐わたりうやうお物も人ぢふぢり
 れ絲いほえぐやふいりす^{ウチ} びと^{ウチ} べど^{ウチ} ぶ^{ウチ}
 う^{ウチ} ね^{ウチ} う^{ウチ} もあ^{ウチ} う^{ウチ} づ^{ウチ} のあ^{ウチ} かり 又^{ウチ} 鏡^{ウチ} ぬ^{ウチ}
 あ^{ウチ} う^{ウチ} ら^{ウチ} う^{ウチ} ま^{ウチ} ん^{ウチ} は^{ウチ} ち^{ウチ} う^{ウチ} げ^{ウチ} ありと^{ウチ} う^{ウチ} ゐ^{ウチ}
 鏡^{ウチ} よ^{ウチ} あ^{ウチ} う^{ウチ} ら^{ウチ} あ^{ウチ} う^{ウチ} ま^{ウチ} ー^{ウチ} ぶ^{ウチ} う^{ウチ} づ^{ウチ} む^{ウチ} ー^{ウチ}
 唐^{ウチ} 室^{ウチ} ー^{ウチ} 物^{ウチ} と^{ウチ} い^{ウチ} け^{ウチ} お^{ウチ} ぐ^{ウチ} ー^{ウチ} 海^{ウチ} よ^{ウチ} 念^{ウチ} へ^{ウチ} け^{ウチ}
 き^{ウチ} ま^{ウチ} ー^{ウチ} に^{ウチ} ぬ^{ウチ} ー^{ウチ} う^{ウチ} ぶ^{ウチ} ー^{ウチ} う^{ウチ} ぶ^{ウチ} の^{ウチ} お^{ウチ} ん^{ウチ} や^{ウチ}
 あ^{ウチ} ー^{ウチ} ん^{ウチ} ー^{ウチ} ち^{ウチ} ー^{ウチ} ぬ^{ウチ} ー^{ウチ} あ^{ウチ} ー^{ウチ} ー^{ウチ} ぶ^{ウチ} ー^{ウチ} 智^{ウチ} づ^{ウチ} ち^{ウチ} に^{ウチ} ち^{ウチ}
 千^{ウチ} の^{ウチ} ー^{ウチ} ま^{ウチ} ー^{ウチ} 入^{ウチ} ち^{ウチ} ー^{ウチ} ー^{ウチ} け^{ウチ} ー^{ウチ} ま^{ウチ} ー^{ウチ} ー^{ウチ}
 狐^{ウチ} わ^{ウチ} く^{ウチ} ー^{ウチ} う^{ウチ} ー^{ウチ} 白^{ウチ} 氏^{ウチ} ぶ^{ウチ} 集^{ウチ} 中^{ウチ} 一^{ウチ} 心^{ウチ} 宅^{ウチ} 詩^{ウチ} 鳥^{ウチ} 鳴^{ウチ} 松^{ウチ} 桂^{ウチ} 枝^{ウチ}

狐^{ウチ} かく^{ウチ} ー^{ウチ} う^{ウチ} ー^{ウチ} 白^{ウチ} 氏^{ウチ} ぶ^{ウチ} 集^{ウチ} 中^{ウチ} 一^{ウチ} 心^{ウチ} 宅^{ウチ} 詩^{ウチ} 鳥^{ウチ} 鳴^{ウチ} 松^{ウチ} 桂^{ウチ} 枝^{ウチ}

狐藏^{ウチ} 蘭^{ウチ} 菊^{ウチ} 叢^{ウチ}

こ^{ウチ} う^{ウチ} ー^{ウチ} ま^{ウチ} ー^{ウチ} 山^{ウチ} 彦^{ウチ} ー^{ウチ} 木^{ウチ} 神^{ウチ} ー^{ウチ} 空^{ウチ} 谷^{ウチ} 舞^{ウチ} 青^{ウチ} ー^{ウチ} 樹^{ウチ} 神^{ウチ}

和^{ウチ} 名^{ウチ} 中^{ウチ} 二^{ウチ} 云^{ウチ} 又^{ウチ} 選^{ウチ} 芸^{ウチ} 城^{ウチ} 賦^{ウチ} 本^{ウチ} 魅^{ウチ} 山^{ウチ} 鬼^{ウチ} 今^{ウチ} 案^{ウチ} 木^{ウチ} 魅^{ウチ}

即^{ウチ} 樹^{ウチ} 神^{ウチ} 也^{ウチ} 和^{ウチ} 名^{ウチ} 也^{ウチ} ち^{ウチ} け^{ウチ} 地^{ウチ} の^{ウチ} 形^{ウチ} と^{ウチ} 云^{ウチ}

源^{ウチ} 氏^{ウチ} 道^{ウチ} 生^{ウチ} う^{ウチ} ん^{ウチ} ー^{ウチ} も^{ウチ} 人^{ウチ} ー^{ウチ} ち^{ウチ} づ^{ウチ} せ^{ウチ} ー^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ}

け^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ}

ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ}

ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ}

ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ}

ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ} ち^{ウチ}

ち^{ウチ} ち^{ウチ}

又鏡もは 神秀曰心如明鏡其臺 六祖曰明鏡
亦非臺 古語云胡来相现漢来漢現

此他家と人形よきしと人としよたふ庄
子ハ是と養生と云道家人も是と金丹と云
禅家ハ真佛屋裏坐しとも屋裏は法
佛 轉佛 心佛とも人ハもつり
人ぞ他家と行人もみどり入瓶菓樹觀
りとも未現と云々 好人家ハ男女被這
一般即机精魅所著便即捏怪しりハ依草
附葉竹木精靈野机精魅向一切蠢塊上亂
咬しりふん也又鏡乃中ありさゆへハ百物
ありさゆへと云つりふハ目ハ眼と云く鑑

覚剛知照燭底安一切各向云ん也釋氏ハ
具心と鏡のこころも女分は田地
のこころハ鏡のこころハ法也 佛は物なり
をこころハ樹ガ山中に入て鬼魅と云れ毎
るが心なりと云ふハ窓の隙と迷れと云
三種病人と云のまき佛なりと云る也又
屋室と云物と云けしと云室にまき佛あり
あり云ん也大覺中ハ海教下遊しりて云
けり云ハ大覺ハありと云れ入るもか
まき佛ありと云るもハありと云れハ一約
名聞圖書屋室也唯自家屋裏物と信得及
しりて外に求めと云ふ物ありと云る也

是皆浮屠氏之言也。若儒者所見所見所見也。

程子曰：聖人之心，明鏡止水。又曰：有主則虛。又曰：中。有主則實。則外惠不能入。朱子歎之曰：有主於中，理義甚實。於是實，因奉林擇之。程曰：有主則虛，神守其都。無主則實，鬼職其室。又程子曰：定者，動亦定，靜亦定。無將迎，無內外。苟以外物為外，事已而後。久是以己性為有內外也。天地之常，以其心普。万物無心，聖人之常，以其情順。萬事而無情，故君子之學，莫若擴然而大公，物未而順。應今以。惡外物之心，而求昭無物之地，是反鑿而索照也。

又朱子曰：主一無適，謂之敬。心之主宰，而万事之根本也。陳氏曰：心之為物，虛靈知覺，所以為一身之主宰也。身無此以為之主宰，則四肢百體皆無所管攝矣。然所以為心者，又當由我有以主宰之。我若何而主宰之乎？所謂敬者，是又一心之主宰也。

丹波云：出雲云々云々あり大社とありして
出雲おがふり

ちいめんさきんとして具ツのていさなるに各
 拜イみて格クしく信シたしうりあなる柳
 子コらういぬさじきとうりうさ南ミよらなる
 多タれば上人シヤウジンのみでく感カンじてあかめさるや
 け柳リウ子コれららやういしあつうらさる
 あくんと感カンぢみてりうり敵トク衆シユウ持ヂ持ヂの事コトの
 心シン後ゴでうりあぢやあぢやうりあぢや
 しうて海ウミも地チもとらうりあぢの心シンより
 とらんゆりあんと人の心シン麻マしうりてお
 けく物モノあうりぬらう都ツしうり神ジン官カンとふじを
 けしはけ柳リウ子コれらとらうりあぢやうりあ
 うりあぢやうりあぢやうりあぢやうりあ

吾輩ワヘイもあさなれさうりうりあもの仕シりける
 任ニめんとも也ナリとてゆりあうりあぢやうりあ
 うりあぢやうりあ人の感カン後ゴりうりあぢやうりあ
 大オホ社シャ 神ジン名ナ帳チャウも多タ社シャと云イハ出デ雲ウン國クニの大オホ社シャ
 を日本ニッポン紀キあは素ソ感カン島シマは子コ大オホ已イ貴キと奈ナい
 ひ津ツ後ゴ念ネンあは素ソ感カン島シマ也ナリとらうり又マタ杵シ春ハル
 明メイ神ジンとて神ジン名ナ也ナリ也ナリ
 志シ太タの集シユ
 聖セイ海カイ上人シヤウジン
 柳リウ子コ拍ハク大オホ 攪カキ餅モチ
 或シカドモ人ヒト金カネ剛ガウ強キヤウは義ギとらうりて函ファンとて貼テ紙シの

而くもる終へく云をせあるは経の要文成
しと目としめ候て誨よけ而儒書ふ考合
きて王夷をべさ事也と好日に造て中られ
るれは落紙の處也たり已が中も耽落
たりぬも他なりしひと校て補出せし
中事として候もされども鄭書燕説の衆
あれはあれがら語を定むべし夫はあらず
中されし
韓非子曰鄭人有遺燕相國書者夜書得持燭
者曰奉燭而誤書奉燭燕相受書曰奉燭者明
者明者奉賢而任之

柳ヤナ葉ハコよまのりののいさくさ内ヨコ換サ換物よまのり
よや書物かごのまうそりすにささく本のあ
ひより紙ひかりと通してぬひはく紙も
くそく向よ電さる筆こ海らさくし
際者大は般作しきき勤解由小路のふれ紙を
の人のかりあもたてさ向よさるる事れ
必換柳よまのりも色ゆりし

柳管ハ伏短冊或鞠冠或又追善の時り
経巻等とさのりま也柳よのつて送
也けし本教意半は義説あり市経
冊とすあて進との可冷泉家ハさる
うへりも也又さるは是は相傳とてさるハ

みましく作事一とて求むるなりしは心なきは
ゆふ丸の巻のそらしくの秘は伝はるや
まじらふあかりれしとてあつたをば
ふぶの事い思ふの常は事なれ者
人いさかのみともいさく自漢しる
也なまぬは乃ゆふし神と秘と一首のら
一あしらあんやと定あつたは作れ
ありし

林の空は葉のたよりを記ささくわ
しそしめは記さるるしとゆれは作
まあしめは記さるるしとゆれは作
てなありと記さるるしとゆれは作

ちどごとくしとてあつたは作れ
丸條お國傳通はれ歎けしもうさのせえ
自漢しる

一
常在光流の流は鐘の飯は五葉の葉
あり行房の物に清きしといふふ
させしとてあつたは作れ
て心せゆしとてあつたは作れ
はささくゆしとてあつたは作れ
百里あやまりしとてあつたは作れ
なりしとてあつたは作れ
許へしとてあつたは作れ
りとなんかありしとてあつたは作れ

物何なりと云ふりあり教歩法んう是末外
ありな瓜不審教ハ四五也鐘四歩不
也ききとをくすゆり也

人あましくなをひて三塔巡礼の事約
根川の常坊聖乃うら新義院とうける
あり紀観あり佐理行成のあひさうさひ
ありていささく決ちずと中侍さあて堂
僧こもくお中侍とてり成なる裏
あり御一佐理ありさうさひさうさひ
あましくひさうさひ小裏に堂はのり出の
業もてりふちさうさひとてり成なる裏
あり御一佐理ありさうさひさうさひ

一 小つんえつうふ人これ具よ
那蘭陀寺とて道眼聖法義とてた災
そのふ事とわされてもやあはれゆふ
りひとて法化らぬさうさひさうさひの
ゆより見さうさひさうさひさうさひ
感とてゆりさ

一 賈物僧正よなをひて加持者水とるゆ
いささくりてぬふ傍さうさひさうさひ
外まで僧却みさ法所さうさひとて
もさあさすりふ回さうさひさうさひ
てえりさあはれさうさひさうさひ
あはれさうさひさうさひさうさひ

しつれより入りてやぐそぐそとてぬ
二月十五日ありて終りおけておな
れ寺よまうとてうらり入りてひらりか
あうとてくしてちやうせん 耻ぢけりゆゑに優ゆうがら女の姿
よわひ人よりしりぬがわをへて勝とくまわく
まばあわひをまもつるのづりなればびんあ
あしおひてありのまきこりよるぬわたりと
おろし様なれとらぬとたあひのひあふゆの
あうれ女房のろであてくおれしゆりて
うゑりよあうとて人よおりしゆりて
るおしとまのこくかんあし恨うらみあし恨うらみ
もあ人なんありてのひらりしゆりて

らそひぬゆりゆりしてやまぬは事ゆよ
きくゆりて後のち聴きの秋あきつらひのゆり
人のひらりしゆりてあし女房をひらり
とてくしゆりてびんよるにま紫むらさあて
きんりのぞとあうとゆあうとてゆあ
うんてとてゆりひらりしゆり

近ちか友とも
寂さび翁おきな 拾しつ芥か云い法ほ住ぢ寺てら建た春はる門かど院いん
は辰たつみおの奈なの重じゆう躬かみが信しん躬かみと落おちのおありと
りひらりしゆりて
当あ代しろ
坊ぼく 表へ六む城じやう也や 住ぢしゆりてまきしゆり

あつたのりさうふ

万里小路殿 里のりさうふへ 去るは時

おのりさうふ也

城河大納言 師伝也 所龍歌 去天の時

ちま也 龍山の鹿流 城河と号す

悪紫之奪珠也 論語陽貨篇

秋の夜の字はたりさうふ也

右々左々 栴梨さうふ也

九条相國

歎状 禁中へ 宿屋とのぞみ 或は折紙

しりあつたのり也 ともあうともいひ也 ちんぷ

よめさうふ也

常春先院

在る 赤紙の位 菅原家也 唐橋の記

とらぬが 補方ハセの録也

草也 下書也 源家と系あふ

行な せきさうふり 城々より十代の録也 陰子

行息の行年のも也

いづた 模 竹乾

よくぞ 忍也 ちりりり ちのれがちりり也

もハ ちりりの入たがこもも也

教り 行の字 庚韻にも 陽韻にも けり

庚韻もてハ 行歩は義也 陽韻もハ 行列の

儀也 敬韻もハ 行跡 徳行の義也 ちりり也

りて教歩の義よりうへ庚辰なりて湯敷
れはたのつらるとも又教はりた不審教ハ
四五也けんどもあつらゆきハ古本よめり
がさしとて海よ書入らるなりて
之塔 山の末塔西塔根川也

常妙堂

龍華院

佐理 正三位前太宰大貳参議佐理卿 小野宮
孫一糸院長徳四年七月晦薨五十九歳公卿補任
行成 正三位太宰権帥権大納言行成卿 圓
融院御宇天祿三年誕生後一條院萬壽三
年二月薨五十六公卿補任

位署 姓名の上より官位とて去速りとて位署よりふ

那桑院寺 通眼 岩上よりんてり

八災 憂若喜樂尋伺出息入息を七八災と云

花業法教よあつ

可化 帥とバ化と云青子とハ可化と云也

質助僧正 醍醐之室院也日野家の人也

加持香水 正月八日より十五日は解きて法事

ありははな七日と云と名よとの交のかわあり加ふ

佛の之密也持ふ行名の之業也彼之密也此

之業よ持らるとか作と云也

千本の寺 釋迦堂也二月十五日ハ遺教經の

法事一なり

とせる事なき事自漢よりあり
余が弱冠の法 太相國のいふに
時元長光依長光清忠極膽も
りれが光武の高祖より幾代
は漢の年紀より傳りし中又
何きの書よりあるをいひし
又くふつは白氏文集李夫人の
侍注とみま武帝のたると
夫人は魂とみま

とありし傳りし又伝るが蘭ハ何と
りれは朱文公の注は澤蘭なり
太相國左伝とありしは
しじの年也なり 敬夫の和歌
碑とて去て思やれ 宣撫作拒絶
却徳徳之と云句あり 却字
た傳よあまのあは字法あり
云々れいげあもさあそと
りて却の字と而乃字あり
菅相の講と道真と云事別
又と

中々んれればと法道江甲嶺金勝寺に宿符、
菅相の親筆なりと見侍るは菅原朝
臣道志と位罽のききとありと
欽夫身に入られ侍りき古向神龍院駿
府へまゐりて 沖節とて日本紀舒明皇極
乃石とてめと作られしとありまゐりて
道春とてよめとの終ふ別よとてなりは
右相國うけ家の女と何とてありまゐり
やと余は作られしとありしは神代乃知と
うれしつはてよみみう人皇紀ありあか
くまゝく侍り侍りしとありしは
初余論語何景集解皇侃疏とありて
十七八歳の法より何とて朱子集注とよ
見大全とかんぐり程子遺書性理大全と
うゝひて朋友のよめと集注乃趣あり
あゝとてききとありしとありしは二十
とて深衣とてとて注説ありしとありし
何日本とて初めとて書とてよめとあり
ぬの罪あり國法ありぬとて人もあり
と何とてしとありけおとつはとて
漢りりやうとて事ども雌蟲象刻の
童子より侍り侍りしとありしとあり

八月十五日九月十二日の婁宿也は宿法明な
るゆへは月と惑ふは星と云

八月十六日中秋とて好月と惑ふ事
るるる李唐の世より登りて詩人又人ま
詠れりしとど古楽府の嬾娥怨の曲
あり漢人此中秋月をささよよありては曲と
作りしあり時と漢の世よりありし事とや
又枚乗が七發は八月の望唐陵の潮とる
とあり潮八月よりささよひてまほはるの
是も月と潮とささよあり

九月十三日の月と惑ふは星と云
て又どもほも下れ也日なりてハ常盤桐葉

府より九月十三日の月とるる潮ありは星と
あり事とや注性を入れた相國の九月十三日
の詩と各詩集のものせり

婁宿 東方七星角亢氐房心尾箕北方七星斗牛
女虚危室壁西方七星奎婁胃昂畢觜參南方七
星井鬼柳星張翼軫

正月一日より十二月晦日まで女八宿と一星は
毎日ありては星と云る宿とて近代ありあり
よりあり星と云る女八宿と治育して日教は配
そ日なりは古備公の相傳也とて別は前後
まじりてあり中法大内回祿なる日斗宿
なりとて本と除て女七宿と云りそかん

うれ八月十六九月十二^{イロヒ}妻宿^{イロヒ}ありけり
兼好も斗宿と^{イロヒ}添^{イロヒ}りけり
八月一^{イロヒ}角二^{イロヒ}元三^{イロヒ}氏四^{イロヒ}房五^{イロヒ}心六^{イロヒ}尾七^{イロヒ}箕八^{イロヒ}
斗九^{イロヒ}女十^{イロヒ}鹿十一^{イロヒ}危十二^{イロヒ}室十三^{イロヒ}壁十四^{イロヒ}奎十五^{イロヒ}婁
也九月一^{イロヒ}氏二^{イロヒ}房三^{イロヒ}心四^{イロヒ}尾五^{イロヒ}箕六^{イロヒ}斗七^{イロヒ}女八^{イロヒ}
危九^{イロヒ}室十^{イロヒ}壁十一^{イロヒ}奎十二^{イロヒ}婁十三^{イロヒ}婁也

あつ浦の^{イロヒ}蟹^{イロヒ}れりめも^{イロヒ}あ^{イロヒ}と^{イロヒ}く^{イロヒ}く^{イロヒ}ふ^{イロヒ}の^{イロヒ}山
も^{イロヒ}え^{イロヒ}け^{イロヒ}人^{イロヒ}志^{イロヒ}あり^{イロヒ}ん^{イロヒ}ふ^{イロヒ}り^{イロヒ}か^{イロヒ}く^{イロヒ}通^{イロヒ}り^{イロヒ}ん^{イロヒ}は^{イロヒ}ま
ら^{イロヒ}そ^{イロヒ}後^{イロヒ}う^{イロヒ}び^{イロヒ}哀^{イロヒ}と^{イロヒ}お^{イロヒ}り^{イロヒ}も^{イロヒ}一^{イロヒ}く^{イロヒ}り^{イロヒ}志^{イロヒ}ま^{イロヒ}ら
く^{イロヒ}く^{イロヒ}く^{イロヒ}も^{イロヒ}お^{イロヒ}り^{イロヒ}め^{イロヒ}お^{イロヒ}や^{イロヒ}り^{イロヒ}か^{イロヒ}く^{イロヒ}ゆ^{イロヒ}り

て^{イロヒ}ひ^{イロヒ}い^{イロヒ}ち^{イロヒ}り^{イロヒ}よ^{イロヒ}び^{イロヒ}り^{イロヒ}あ^{イロヒ}ん^{イロヒ}い^{イロヒ}ま^{イロヒ}ま^{イロヒ}ら^{イロヒ}ゆ^{イロヒ}り
く^{イロヒ}ぬ^{イロヒ}ぐ^{イロヒ}せ^{イロヒ}あり^{イロヒ}侘^{イロヒ}け^{イロヒ}女^{イロヒ}の^{イロヒ}ま^{イロヒ}げ^{イロヒ}お^{イロヒ}り^{イロヒ}元
法師^{イロヒ}あ^{イロヒ}や^{イロヒ}の^{イロヒ}吾^{イロヒ}妻^{イロヒ}あ^{イロヒ}人^{イロヒ}なり^{イロヒ}と^{イロヒ}毎^{イロヒ}み^{イロヒ}笑^{イロヒ}り^{イロヒ}し
ま^{イロヒ}に^{イロヒ}つ^{イロヒ}ま^{イロヒ}て^{イロヒ}さ^{イロヒ}そ^{イロヒ}ふ^{イロヒ}水^{イロヒ}あ^{イロヒ}り^{イロヒ}な^{イロヒ}ど^{イロヒ}と^{イロヒ}お^{イロヒ}り
人^{イロヒ}何^{イロヒ}も^{イロヒ}も^{イロヒ}ん^{イロヒ}は^{イロヒ}い^{イロヒ}ま^{イロヒ}ゆ^{イロヒ}い^{イロヒ}ひ^{イロヒ}な^{イロヒ}と^{イロヒ}あ^{イロヒ}り
れ^{イロヒ}ど^{イロヒ}あ^{イロヒ}り^{イロヒ}ぬ^{イロヒ}人^{イロヒ}と^{イロヒ}い^{イロヒ}う^{イロヒ}り^{イロヒ}と^{イロヒ}あ^{イロヒ}り^{イロヒ}ん^{イロヒ}あ^{イロヒ}い^{イロヒ}お^{イロヒ}り
よ^{イロヒ}何^{イロヒ}事^{イロヒ}も^{イロヒ}な^{イロヒ}ら^{イロヒ}い^{イロヒ}づ^{イロヒ}る^{イロヒ}云^{イロヒ}の^{イロヒ}ま^{イロヒ}ま^{イロヒ}ん^{イロヒ}年^{イロヒ}月^{イロヒ}は
つ^{イロヒ}ら^{イロヒ}ん^{イロヒ}も^{イロヒ}か^{イロヒ}く^{イロヒ}葉^{イロヒ}山^{イロヒ}は^{イロヒ}お^{イロヒ}り^{イロヒ}も^{イロヒ}あ^{イロヒ}い^{イロヒ}ま^{イロヒ}ら
り^{イロヒ}ん^{イロヒ}と^{イロヒ}は^{イロヒ}よ^{イロヒ}ち^{イロヒ}ぬ^{イロヒ}ま^{イロヒ}の^{イロヒ}り^{イロヒ}ま^{イロヒ}も^{イロヒ}あ^{イロヒ}り^{イロヒ}め^{イロヒ}ま^{イロヒ}ら^{イロヒ}て
録^{イロヒ}お^{イロヒ}り^{イロヒ}人^{イロヒ}の^{イロヒ}な^{イロヒ}ら^{イロヒ}あ^{イロヒ}い^{イロヒ}ま^{イロヒ}ら^{イロヒ}ん^{イロヒ}と^{イロヒ}そ^{イロヒ}ら^{イロヒ}つ^{イロヒ}か
ら^{イロヒ}ま^{イロヒ}ら^{イロヒ}お^{イロヒ}り^{イロヒ}る^{イロヒ}づ^{イロヒ}ら^{イロヒ}よ^{イロヒ}ら^{イロヒ}女^{イロヒ}ら^{イロヒ}ん^{イロヒ}よ^{イロヒ}つ^{イロヒ}け^{イロヒ}も
無^{イロヒ}く^{イロヒ}ら^{イロヒ}り^{イロヒ}る^{イロヒ}も^{イロヒ}年^{イロヒ}と^{イロヒ}去^{イロヒ}り^{イロヒ}ん^{イロヒ}思^{イロヒ}ひ^{イロヒ}か^{イロヒ}ら^{イロヒ}あ^{イロヒ}や

しきまつりめよあまのこも成つてさづまな
 るんややく人もんれりせられわが母のひり
 ひわももんも新づつしく是んぬんとそ
 あひあもめ梅は花うりつしき夜は月
 きくきんみりさかたつろ露分ぞん在明
 けあも我が浦よあのがりてくもあさむ人
 きこ色このやけんまあさ

信使浦 奥別は信使郡あり

ありてくろく物々人のみあぶの浦れ
 彦やれしくがと新あは

は飯猪の洞のあかまにけさるあり
 何をし 和校 津波野聚あり

くふれ山 山城の名あ也暗部中くあ也古
 今よ 梅の花あふ春つらくあやんあきと
 ありてくろく物々 秋はよ晴布山とさむり
 質之があま
 秋霧れまのりあくあ山むつああそそあつり
 新づつ別よまこり
 しくかす 兄や也
 いしく肉あふりぬぐ ちや兄やもありえ
 女とびくさばはづかりあんと也
 せもありわあ
 けげあき 不和合也
 うさつりあさ 豊鏡 富鏡也

あつま入 田舎人也

さきふあめくが 古今小町が欲けひぬきハ
とくさくあけ福をさくさくふ水あけのらん
そ思 文成康秀がふ河のさうに成てあぐさ
あけえいぞくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
偶家た女のおく琵琶といひさくせよめさく
えれが身さくけてあめ茶さくさく高人の
婦さくさくさくさくさくさくさくさくさく
たり人 媒也遊仙窟に柱さくさくさく
媒約人の双方さくさくさくさくさくさくさく
婚姻さくさくさくさくさくさくさくさくさく

あいらり 本家さくさくさくさくさくさくさく

さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
あささくさくさくさくさくさくさくさくさく
梅のさくさくさくさくさくさくさくさくさく
む月さくさくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
みさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
望月のさくさくさくさくさくさくさくさくさく
あ代さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

至月モチツキの戸やうるの事ハありくも位ぎげやが
 てしけぬんしめぬ人ハ一欲の中ハさきまでら
 けりけりもみぬよやあらん病ヤミのありも
 位する際イサあくして死シの脈マツをくしりも
 病ヤミもついで病ヤミ急るうは死シもむり
 けり種ハ常位平生れ念ハ習ひて生の中ハ
 何々の事と成して後果レツカも度と修シん
 かりふ知と病ヤミさうけく死シ門カドのぞむ時ハ
 都一事も成シてけりふいあくて年月の懈ケ
 急と悔クてはなありらなりて命イデとさく
 といれと目メはよては事コト彼カりともさく
 かりんし形カタルシとたす厚コトめとやとさく

月ツキの成ナリもあつてさく
 くらひのみありあは事コトづんといさく
 んよとさく一雨アメと成シて後ノチありて
 せむりんとさくは死シはさくわカの生ナリ
 中ナカハ何事ナニカとさくすて一雨アメ清スき
 雨アメのさくさく一雨アメ速イサく一雨アメ
 ともさくさく一雨アメ茶チ事コトと路ミチト一雨アメ
 むり付ツキさりりさくは作サくしてん力チカラさくさ
 づり也

至月モチツキの圖エトカなり事ハ 易ヤキ豊卦ホウケ云月盈則食ミチルモノハ
 親名ミナ曰月ツキ滿ミツク也滿則缺ミツクニハカケル也望月モチハ滿ミツク之名也日月ヒトツキ遙相トヨカ
 望者モチ也

ふもめぬ人ハ 心をつきぬ人ハ 一秋のちよき
ゆで月のころろくいあ〜とあもあもあ
十六夜は月をききよ一分の明をわく〜と
ゆる詩人もも又りごとく不日う〜とやう
りもああり

鄭谷が十日菊と清香一秋よ嘉(だ)く云

教もあり

如幻の生

金剛經よ如愛幻泡影

妄想

各業禪師曰莫妄想とあると若中

同答よ

禪せる事あり

放下

禪語よ放下着つふやなげさつ候

やう〜人ハ違順よはらりり〜事ハ〜事ハ
若樂乃〜也 亦〜のふ〜の〜事也
是と求ふ〜やむ時か〜系歎其り而〜
名也若〜二種ありり〜と〜の巻
あり二〜と名歎〜味ありり〜の福が
はら〜と〜は〜顛倒の相よりわ〜と
はら〜ら〜ありり〜と〜と〜

違順道 其のち也 其時の也

違順道 其の也

佛眼遠禪師云若樂違順道在其中 動靜空

漫自愧自悔

が云わぬ法苑經八歳の龍女佛よあひて南
方無垢の戒道と唱ふる記前とうなり
ふと以ていつるなり
佛ハいつりなり物なりん

報恩經曰佛以法為師仏從法生法是佛母仏
依法住於三空中何不以法為初佛言法雖是
仏師而非仏不弘所謂道由人弘是故佛先法
後也見釈氏要覽中卷一

台宗本然法師立於起有情是無而忽有者也
有一禪人告余曰米穀懷中經歲虫生彼有疑
於此耳彼豈能知氣化形化之理哉
大藏一覽一云釈迦譜云劫初天地大水彌滿風

吹漸滅次第結沫化為天宮乃至山嶽平陸成
洲深壑成海從上至下依曰建立光音天人乃飛
下來各有身光飛行自在在地味香甘因食彼故
体重光滅後飛不起日月垢生乃分晝夜因貪食
故地味遂滅後生婆羅漢四維滅故漫生粳米長
四寸半朝割暮生因食米故方分男形女相後貪
積聚割不復生後相侵盜無能沃者議立一智
者三摩多為平等王賞善罰惡象共給之
起世因本經云是平等王子孫相養三十三世善
思王後乃澄轉輪聖王之位王曰天下直至師子
頰王凡一百卅一萬九千六百五十七師子頰生四子一名淨飯
二名白飯三名斛飯四名甘露飯淨飯王生三子一

名悉達多一名難陀白飯二子一名帝沙一名難
提迦斛飯二子一名阿尼婁駄一名跋提梨迦耳
露飯二子一名阿難陀一名提婆達多且悉達多
世尊一子名羅睺羅
小名

佛說小因緣起經云云
盤古皇と云ふ似り 我朝の神代
十二世韓國の檀君千年かぐ云々
今いかに程子の説を引て人物生るる所
と云ふ

程子送書十八云或問方丈之時人還与物同生否
曰曰莫是純氣為人歟氣為虫曰然人乃五行
之秀氣此是天地清純粹氣所生也或曰
人初生時是以氣化否曰此必地理當徐論之且
如海上忽有沙島便有草木生有土而生草
木不復惟既有草木自然禽獸生焉或曰先生
招錄中云焉知海島上無氣化人如何曰是道
久知固無誤是極遠處有不可知曰今天下未有
無父母人古有氣化今無氣化何也曰有兩般
有全氣氣化而生者若腐草化為螢也既氣
氣化到合化時自化有氣化生之後而後生者
且如人身上著新衣服過日便有醜氣生其間

此氣化也氣既化後更不化便以種生去此理甚明

空よりやうらん

礼記問喪篇云礼義之經非從天降也非從地出也人情而已矣

佛說三身壽量無邊經曰文殊白佛言我等從昔聞如來說法如來何佛聞此說法佛告文殊言過四十一重內大院兼大毗盧遮那說法文殊重白佛言四十一重內大院何者是耶世尊復言過十住十行十迴向十地等覺內大院兼妙覺地毘盧遮那從何佛兼說法文殊重白佛言妙覺地毘盧遮那從何佛兼說法世尊復言妙覺地毘盧遮那兼無始無終一心一念本佛說法文殊重白佛言無始無終一心一念本佛兼何佛說法世尊復言無始無終一心一念本佛兼無心無念本佛說法文殊重白佛言無心無念本佛兼何佛說法

世尊復言無心無念本佛上更無佛陀無前
仙無後仙無心無念本仙以不思議為體無
本去來無三身性無十界性今忘不記

羅山氏以餘力閱無好草蓋丈彼
舖佛老之精魄揮清梵之筆精
非不滌洒非不風流非不跌宕非
不戲謔於世與富貴欲人易言與要
名利者難言與玩詞者易言與
知後德者難言難於果於避世
交於隱遯長法之人而後有看

接引之意者聖賢待衰公之志也
我今以舟草為國俗所玩故從之接
經書之誤解以國語寫以俸字傳
會以安策之也雖有杜樞之議我於所
謂用牛刀割武庫之雞黍齏豆恥折
楊皇之舞之耳者即易曰初約自歸是
由人所易曉而善道守之也今杜樞解亦
是困守國俗之空牘也其斯亦
已矣乎楊子雲曰立星子雕蟲篆家
刻俄而曰壯文不為也

羅浮散逸道春題

野槌下卷六終

四維山先生野槌上下十四卷の各段十年
三月廿六日起筆十一月十日冒筆
し

中村直衛

